

漢籍の整理等を学んで

加藤博之

一 はじめに

京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター（以下「漢字情報研究センター」）が開催する漢籍担当職員講習会に運良く参加する機会を得た私は、10日間にわたり漢籍およびその整理法についての講義を受けた。“運良く”と述べたのは、この講習会は全国各地の漢籍を所蔵する機関から受講申込があるにもかかわらず、受講定員が20名と少ないため、日々の業務の中で漢籍を扱うでもない私は選考に漏れるだろうと思っていただけである。実際に講習会に参加してみると、今回初級コースを受講した19名のメンバーの中で近畿2府4県からの参加者は10名と約半数止まりで、残りのメンバーは鳥取、東京、長野、山口、岡山、九州といった遠方からはるばる京都の北白川に来られていた。そういったことを知った講習初日は「よく参加できたな」と思う一方で、「いい加減な態度で講義にのぞんでは選に漏れた方に申し訳ない」と意気込むとともに、当日までに漢籍についての予習らしい予習をしなかった自分を反省することになった。

ここで、私がこの講習会の受講を希望した理由について述べる。

この講習会のことを知ったとき、私は図書館でいわゆる司書らしい仕事をするようになって1年半ほど経過した頃であった。その時点で自分の得意分野、不得意分野を考えたときに、今の自分から一番距離があり、理解するのが難しいのにもかかわらず、「いざ勉強」と思うと腰が重くなってしまうのが“漢籍”であった。

たとえばレファレンス業務をしているときに、利用者からの質問や調査依頼の内容が、現代の日本語もしくは英語で書かれた資料を対象とするものであり、なおかつ、文系分野であれば、なかなかの勝率でもって利用者の方々に満足いただけるようなサービスを提供することができるようになったのではないかと、その頃はそう考えていたのである。質問の

内容が理工系分野だったときは、文系学部出身者としては苦手意識が先行するものの、自然科学・工学系の文献に関する情報は、国内・海外ともにデジタル化が進んでいるし、基本的に現代日本語か英語で書かれている新しい文献に当るのが普通であるから、何とかこなせてきたのである。

一方、漢籍はどうかというと、これまでに漢籍に関する質問を受けたことは幸いにしてなかったのであるが、まったく自信がなかったのである。言い訳がましくなるが、漢籍などは現代社会に普通に生きていたら、あまり日常生活の中で意識するものではない。だから、ある時に「漢籍も学ばなくては」と思っても、忙しく過ごしているうちに忘却の彼方、であったのである。

そんな中、この講習会のことを知り、受講期間中は漢籍のこと以外は考えない、といった感じのこの講習会であれば、きつとしっかり漢籍のことを学べるに違いないと思い参加を希望した次第である。

二 漢籍担当者職員講習会について

私個人の話が長くなったが、次に当講習会の概要について述べる。

当講習会は初級コースと中級コースがあり、私はこの両方を受講した。初級コースについては当「図書館フォーラム」の第7号（2002）に「平成13年度漢籍担当職員講習会（初級）参加報告書」と題して詳細な報告が掲載されている⁽¹⁾。主催者や場所、期間などはほとんど変わりが無いが、平成13年度に初級で講義されていた四部分類法については今回の平成20年度では中級で講義され、今回の初級では四部分類法については概要を講義するにとどまった。その代わりに、漢籍を翻刻⁽²⁾してできた「和刻本」・「朝鮮本」についての講義が追加されていた。

また、午後の時間が漢籍目録作成の実習に当てられているのは今も昔も変わらないのであるが、13年度は目録カードのみの作成だったのに対して、20年

度は、目録カード作成実習は2日目の1コマのみとなり、3日以降は漢籍レコードエディタというソフトウェアを使った目録データ作成の実習となっていた。つまり、目録作成実習のツールがカードからパソコンへと変わったのである。この漢籍レコードエディタというものは漢字情報研究センターが管理・運営している全国漢籍データベース⁽³⁾の書誌データ入力用フリーウェア・ソフトである。データ作成実習の内容については後で述べるが全国漢籍データベースの事業が始まったのが平成13年度(2001)であり、また漢字情報研究センターのウェブサイトに「平成14年度にこの講習会の内容を一新した」とあるので、第7号のレポートが旧カリキュラムのレポートになり、私のレポートが新カリキュラムのレポートになるのだろう。

ここでちょっと寄り道して、会場となった漢字情報研究センターの建物について話をしたい。

この建物は1929年4月に義和団の乱の賠償金を資金とした「東方文化事業」の一環として設立された東方文化学院京都研究所として建築された建物である。義和団の乱の賠償金、というところに歴史を感じる。1930年11月に新築された所屋は武田五一氏と東畑謙三氏によって設計され、スペインの僧院を模したロマネスク様式に東洋風を加味した建物である。2000年には文化庁「登録有形文化財」に指定された。この建物だけを見に来られる観光客もおられるそうなのだが、それもうなずける。なお、設計の実際の任にあたった東畑氏は当時27歳の大学院生だったと聞き、驚いた。建物の入り口にはキンモクセイが植わっている。秋の季語にもなっているこの樹は受講期間中、良い香りを楽しませてくれた。キンモクセイといえば、開講初日の挨拶で漢字情報研究センター長の森時彦京都大学教授が『キンモクセイは“桂花”の名で呼ばれ、「桂」とは中国語発音で「尊」に通じます。大事なお客様を迎えるときに咲き始めてくれて嬉しく思います。』と我々受講生に話して下さったことが印象に残っている。

建物中央には尖塔があり、方向音痴な私はこの尖塔のおかげでバスの停留所から道に迷わずに会場までたどり着けることができた。

中庭は研究棟に囲まれている。研究棟に囲まれたこの中庭にいて、この建物の周辺は閑静な住宅地であり音もしない上に、視野は研究棟に遮られて晴れた日はただっ広い青空しか見えず、ときおり銀閣寺のほうから鳶がのどかに空を舞っていたりする



人文科学研究所分館 漢字情報研究センター

と、一日中いにしえの文献「漢籍」ばかりみているのも相まって、時間がゆっくり流れている別世界にでも居るような心地がしてならなかった⁽⁴⁾。

受講生が講義を受け、実習を行うのは閲覧室である。スペインの僧院を模して建造された建物の一室だけあって、この閲覧室は中国学の研究のための部屋というよりは、教会の礼拝堂のような荘厳な雰囲気の一部屋であった。しかし、扉の上を気をつけて見ると、朱雀、白虎、青龍、玄武といった四神の彫刻が飾られていて、細かなところにアジアテイストが散りばめられていた。更に閲覧室への階段には赤いカーペットまでひかれている。この部屋に入ただけでも思わず「来てよかったなあ」と思ってしまっただけは私だけだったであろうか。ただし、暖房器



閲覧室

具はないので11月は非常に冷えた。この素晴らしい空間の中で、古代中国のロマンと興味深い講義に浸り切るためには、ひざ掛けなどを持参するとよいと思う。

三 初級コース

初級コースのプログラム

日程	題目
10/6 (月)	開講挨拶
	1. 漢籍について
	2. カードのとり方
10/7 (火)	3. 工具書について
	4. 漢籍カード作成実習
10/8 (水)	5. 目録検索とデータベース検索
	6-1. 漢籍データ入力実習 (1)
10/9 (木)	7. 和刻本について
	6-2. 漢籍データ入力実習 (2)
10/10 (金)	8. 朝鮮本について
	9. 実習解説
	10. 情報交換・質疑応答
	11. 終了挨拶

初級コースについてここから述べたいと思う。しかし、中級コースと合わせると10日間におよぶこの講習会を事細かに振り返ると原稿スペースが足りなくなるので、印象に残っていることのみを報告していくことにする。そのため偏った内容の報告になるかもしれないが、なにとぞお許しいただきたい。

(1) 机の上に用意されていた文献について

閲覧室の各席には目録データ作成のためのノートパソコンの他にいくつかの参考文献が準備されていた。これらの文献は漢籍整理にあたっての基本的な文献ということで配布されていたと思われるので参考に紹介しておく。

- ① 『東方年表 掌中版』 平楽寺書店
- ② 『知の座標 中国目録学』 井波陵一
- ③ 『ユニコード漢字情報辞典』
- ④ 『漢字目録-カードの取り方』 朋友書店 京大人文科学研究所漢字情報研究センター編
- ⑤ 『京都大学人文科学研究所漢籍分類目録』
- ⑥ 『京都大学人文科学研究所漢籍目録』
- ⑦ 『漢字情報研究センター 東方学資料叢刊 第12冊 漢籍目録を読む』 井波陵一

⑧ 『京都大学人文科学研究所漢籍分類一覧』

(2) この講習会の目的について

—————10/6 「1. 漢籍について」より

最初の「1. 漢籍について」の講義の中で漢字情報研究センター主任の井波陵一先生が当講習会の目的について荘子の寓話『庖丁⁽⁵⁾』を引き合いに教えてくださいました。

『庖丁』という話をかなり省略して紹介する。

“庖丁(ほうてい、料理人の丁の意)が文惠君のために牛を料理したときに、文惠君が庖丁の見事な腕前にすっかり感嘆し、「ああ、見事なものだ。技もなんとここまでゆきつけるものか」といった。それに対して庖丁が自らの技の難しさと奥深さを文惠君に申し上げた。”というものである。

この寓話を引き合いにして、技を極めるのは並大抵ではないし、教えるのも並大抵ではない、と井波先生は論ぜられ、では伝えることもできない、教えることもできないのならこの講習会は何なのか、というそれは、“漢籍のしくみを知り、コツを掴むことがこの講習会の目的です”と述べられた。

さらに付け加えて「これからの講義ではリトマス紙や顕微鏡を得ることが目的であり、10枚のシャーレの上に白い粉があったならば、それらはそれぞれ何者か?という問いに答えることができる道具を得ることがこの講習会の目的です。」と述べられ、最後に「一番大切なことは『漢籍とは何か?』ということを学ぶということです。」と締めくくられた。

(3) カードの取り方について

—————10/6 「2. カードのとり方」より

1日目の午後は漢籍目録カードの作成についての講義であった。具体的な講義内容は『漢字目録-カードの取り方』(朋友書店 京大人文科学研究所漢字情報研究センター編)をもとに漢籍整理法を解説するものであった。講義形式の他の授業はすべて午前10時-12時の2時間の授業時間であったのに対し、この講義は13時-17時の4時間の授業時間であった。

4時間の授業時間というやや長く感じるかもしれないが、初心者ばかりに4時間たらずで漢籍整理の方法を教授するのでかなり駆け足の授業にならざるを得ない。そのため講義内容に追いつくのに精一杯でアツという間に時間が過ぎた。個人的には受講前にこの授業のテキストになっている『漢字目録-カードの取り方』に目を通していくのが得策だった

のではないかと思う。今後、関西大学図書館からこの講習会を受講される方は、事務用として旧学術資料課がこの資料を購入して備え付けているので、一読していかれることをお勧めする。

余談であるが、受講時にはこのテキストは現在品切れ状態であったが、我々初級コースの受講者から再版を求める声があがったため、井波先生が出版者である朋友書店に再出版を依頼しますと約束してくださいました。近々ふたたび購入できるようになるものと思われる。

さて、ここで素朴な疑問を解決する。

目録がデータベースに移ったのに何故旧来のカード目録作成法を講義するのだろうか？ということである。これは現在運用されている全国漢籍データベースのフォーマットがカード目録、冊子目録に基づいているため、データを作成するために今なお、カード作成の知識が必要となるからである。テキスト『漢字目録—カードの取り方』の序文にも「また、現在運用中の漢籍目録データベースはフォーマットもカード目録、冊子目録に基づいている。本書は、漢籍整理の根幹とも言うべきカード目録作成の要点を記したものである」と記されている⁽⁶⁾。

ただ、ここで注意しておかねばならないことは当講習会で習う漢籍整理の方法は京都大学人文研の整理法であり、全国統一の漢籍書誌記述法ではない、ということである。

私はあまり目録作成に詳しい者ではないが、一般的な図書・雑誌については統一した目録情報の基準というものが定められ、おおむね似たようなルールで目録情報が採られていると理解している。

それに対して漢籍には統一の書誌記述の基準はないということであった。したがってこの講習会で習う目録記述法もいくつかの漢籍書誌記述法の1つなのである。

さらにNCにおいても全国漢籍データベースにおいても、記述対象資料毎に別書誌レコードを作成することとなっている。つまり、各々の図書館が各々の資料について各々の品質レベルの書誌レコードを作成することとなる。NCのように図書館間で書誌同定のための手続きは行われないのである。

そのため、書誌レコードにはバラツキが生じ、利用者が検索結果から同一版本を同定する必要があるのである。

(こういった漢籍目録の書誌記述の標準化の問題については一橋大学附属図書館の高橋菜奈子氏の論

考⁽⁷⁾に詳しいので興味のある方は一度読んでください。)

しかし、私のようにレファレンス業務などにおいてデータベースを利用する側の人間にとっては、このような目録作成者側の事情を知ることは有益であった。なぜなら(1)漢籍資料のデータには目録記述においてバラツキがあること、(2)検索結果からたやすく書誌を同定することができないということを知ることで、より慎重により正確に利用者に対して資料情報を提供しようと心掛けることにつながるからである。

(4) 長澤文庫について

—————10/9「7. 和刻本について」より

講義の中で、本学に縁の深い長澤規矩他先生と本学蔵書について言及されたことがあったので紹介しておく。

和刻本という聞きなれない言葉を広辞苑(第6版)で引くと“漢籍・朝鮮本を日本において再作成したもの。単純な覆刻ではなく、校訂・訓点が施されたものも多い”とある。実はこの和刻本という言葉自体が長澤先生によって作られた言葉で、奈良時代から続いている日本の漢籍出版のうち、江戸時代の日本の漢籍を長澤先生が和刻本と呼ぶこととし、江戸時代以前の日本の漢籍を旧刊本と呼ぶこととしたのだと講義のなかで教えていただいた。そのためか、最新の第6版広辞苑(2008年)には和刻本という言葉は収載されているが、事務室にあった第3版(1980年)には収載されていなかった。

長澤先生は和刻本を晩年の研究対象とし、その研究成果として『學書言志軒藏書目録⁽⁸⁾』(長澤先生が自分の蔵書で作った目録で最初の和刻本目録)および『和刻本漢籍分類目録⁽⁹⁾』(手書きの原稿を印刷したもの。和刻本の分類はこの本ですべて解決すること)などが出版されたが、今こういった資料が本学図書館に全て収蔵されているとのことだった。

研修先の講義のなかで、自分の勤務している図書館について言及されることは、本来ならば非常に嬉しいことなのであろうが、私は自分の勤務している図書館にこういった資料があることすら知らなかったもので、冷や汗をかいてしまった。

四 中級コース

中級コースのプログラム

日程	題目
11/10 (月)	開講挨拶
	1. 経部について
	2. 叢書部について
	3. 叢書と漢籍データベース
11/11 (火)	4. 史部について
	5-1. 漢籍データ入力実習
11/12 (水)	6. 子部について
	5-2. 漢籍データ入力実習
11/13 (木)	7. 集部について
	5-3. 漢籍データ入力実習
11/14 (金)	1. 実習解説
	2. 現代中国書について
	3. 情報交換・質疑応答
	4. 終了挨拶

続けて中級コースの話をする。

中級コースの講義の内容は専ら四部分類についてのものであった。既述のように四部分類については旧カリキュラムでは初級コースにて講義されており、その内容については当「図書館フォーラム」の第7号(2002)に「平成13年度漢籍担当職員講習会(初級)参加報告書」と題して詳細な報告が掲載されているので、そちらをご参照いただきたい。

また先に紹介したように、漢字情報研究センターの方が予め受講生一人一人に準備してくださっていた文献の中に「知の座標 中国目録学」(井波陵一白帝社)⁽¹⁰⁾という資料があったが、この資料の中で漢字情報研究センター所主任の井波陵一先生が四部分類についてわかりやすく解説されているので、四部分類について学ぼう、という方には一読を勧める。

さて、この中級コースの報告の中では、主に午後の漢籍データ入力実習について話を進めることとする。

この実習についてフォーラム第7号のレポートの中では次のように報告されている。

“実習教材として用意された漢籍を、各人が選び取り、カードを作成しながら、分からない点を講師に質問する、という個人単位の研修である。

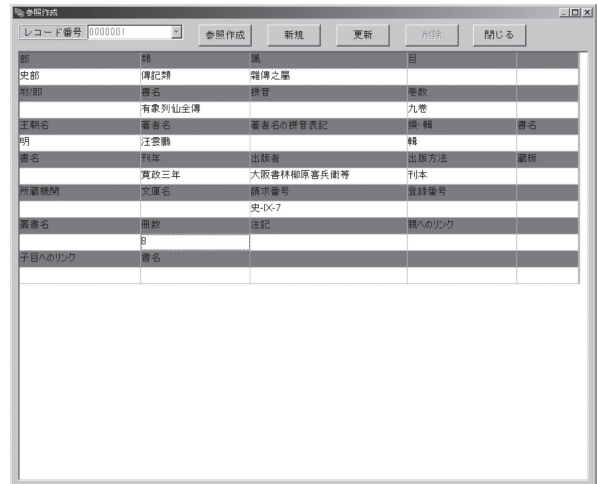
扱った資料により難易度が違い、複雑な資料の書誌を作成したほうが断然得ることが多く、講師にど

んどん質問した人がより理解を深めることになる。かといって、よく調べもせずに質問したり、アドバイスを求めると、工具書をきちんと調べたか、何を根拠にそう判断したのか、などと逆に質問されることになり、厳しい授業でもあった。”

このような実習の雰囲気は新カリキュラムの平成20年度も同様であった。変更点は、前述のとおり目録作成実習のツールがカードからパソコンへと変わったということである。

したがってカード作成時代は漢籍から得た書誌情報をカードに書き込むという実習方法だったが、現在は『漢籍レコードエディタ』というソフトウェアを使って実習を行うことになる。

このソフトに書名・撰者名・出版情報などを入力すると、そのデータがそのまま「全国漢籍データベース」の入力フォーマットに従ったデータとなる。



漢籍レコードエディタ入力画面

```

nu: 0000010
ti: 許學四種
au: 清、金鉞、輯
yr: 民國八年
.
.
.
    
```

漢籍レコードエディタで入力されたデータ (サンプル)

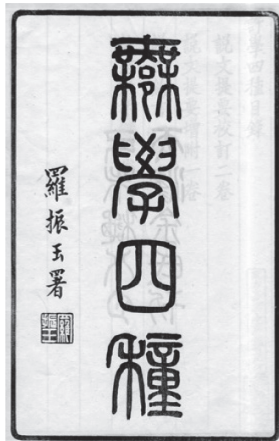
このようなツールを使い、どんどん漢籍資料がデータベース化されれば、漢籍資料を探すときに、google検索をするときのような気楽さで作業を始めることができるようになり、多くの人の役に立つと

思える。前述の高橋氏の論文にも“従来、手持ちの冊子体目録を個々に調べるしかなかった状態から、総合目録データベースで検索すれば関連のありそうな資料の存在を知ることができるようになったことは大きな前進である。”とあるように。

とは言うものの、時代が進んで書誌を記述する媒体がカードからパソコンになっても、書誌情報を入力するプロセスは変わらない。漢籍を整理しようとする者は漢籍を手にとり、漢字ばかりの文章をウンウンとうなりながら読まなければならない。漢籍データ入力実習ではまさにそのところを体験、学習させていただいた。

実習にてある漢籍の書名と刊行年を特定するまで

———筆者が「許學四種」に取り組んだときの例
許學四種という漢籍の表紙をめくるとまず封面があり、そこに「許學四種 羅振玉署」と書いてある。



これを見ればとりあえず“この漢籍のタイトルは『許學四種』であり、著者は『羅振玉』だ”と思いたくなる。しかし、これがいきなり引っ掛けである(専門家の目から見れば引っ掛けでも何でもないのかもしれませんが)。

この場合まず、タイトルについては漢籍の場合、『書名は原則として巻頭の書名を採る』というルールがあり、封面や題簽に書名らしきものが記されていても飛びついてはならない。漢籍に用いられる装丁は破損しやすいし、題簽や封面はしばしば取り替えられるため、それらに書かれている書名がまったく統一していないこともあるからである。また、著者の情報と思われた“羅振玉署”についてはこの封面の文字を書いた歴史学者の名前であり、この漢籍自体の書誌そのものには関係のない名前なのであった。こんなところが現代書とは勝手が違うので、漢

籍初心者はとまどうことになるのであった。

結果的には書名は「許學四種」でよかったのだが、全国漢籍データベースは旧字体で統一しているためこの書名も「学」ではなく「學」という旧字体で入力しなければならない。これはカード目録が画数でインデックス化されており、ある漢字は旧字体で、ある漢字は常用漢字ということでは画数が変わって混乱が生じるため、ということであった。

このように旧字体で文字を入れる必要があるときは、「校閲君」⁽¹¹⁾という旧字体置換のウェブサイトが便利だと教えてもらった。

また次のページをめくると、次のような文字が飛び込んできて困惑することになった。



篆刻である。私のこれまでの人生でこういった文字の意味を知ろうと考えたことがなかったので調べ方がわからなかった。

幸い、近くに漢字情報研究センターの先生がいてくれたので手をあげて質問してみると、篆和辞典なるものを紹介していただいた。が、この辞典も初学者にはなかなかやっかいであった。というのもこの辞書は漢和辞典同様、部首検索で意味を知りたい文字を特定するので、部首の部分だけは絵のような文字そのものから「常用漢字の部首だったら、これは何に当たるのか？」と推測して、頭の中で変換しなければならない。慣れるとある程度はスイスイと探せるようなのだが、なにぶん私は初めての経験であったので、辞典を引くだけでもずいぶん時間を費やす羽目になった。

なお、この3文字は「己」「未」「刊」の意であり、この漢籍の刊行年がわかる非常に重要な情報であった。漢籍では当然のことながら出版年は西暦表記ではない。基本的に十干と十二支を掛けた干支で表されている。篆刻を解読してわかったのは「己(ツチノト)」と「未(ひつじ)」だけであるので、この2つの文字からだけではいつ発行されたのかを特定でき

なかった。そのため著者情報を探し、その著者の生まれた時代から東方年表を使って刊行年を特定するという作戦をとることにした。ちなみにこの漢籍の撰者である金鉞氏は清朝後期のうまれであることが判明したため、「刊行年は民國八年である」という結論に至ることができた。

——と、このように私の場合は試行錯誤しながら漢籍データ作成実習を進めた。

私の感想ではこの講習会の中で何よりも素晴らしいのがこの実習であると思う。この実習は連日13時から17時までの時間がとられているが、その間常に数名の漢字情報研究センターの先生が閲覧室に常駐してくれて、何か困ったことがあると何かと救いの手を差し伸べてくれる。先生方はどの方も漢籍の研究者なのだが、自身の研究のための貴重な時間を割いて、長時間受講生の指導にあたってくれるのである。自分たちが図書館ガイダンスでこのような献身的なサービスを、たとえ5日間といえども行えることができるか、ということを考えると、この実習授業の贅沢さが身にしみるほどわかるというものである。

五 おわりに

以上、私が受講させていただいた漢籍担当職員講習会について印象に残っていることを振り返ってみた。当講習会は10日間におよぶ長期のものであるため、ここで報告したことはすべてのカリキュラムのごく一部にすぎない。報告させていただいた内容も筆者の力不足でもととの良さが十分に伝わっていないことと思う。当講習会への参加を検討されている方は、百聞は一見にしかず、是非実際に受講していただきたい。漢籍の講習会というと堅苦しいイメージがあるかもしれないが、心配はいらない。この講習会に関しては非常にアットホームな雰囲気の中で、楽しく漢籍を学ぶことができる。漢籍を教授して下さる研究者の方々も壇上から漢籍について教授するというよりは、漢籍の良さや魅力を伝えた

い、漢籍という素晴らしい文献がきちんと整理され公開され利用されるように、漢籍整理の人材を育てたい、という気持ちで受講生に接して下さる方がかりであった。それは漢字情報研究センターの方々がみなさん漢籍の魅力にどっぷり浸った人たちであり、本当に漢籍を愛でてらっしゃるからであろう。実際、そのような先生方と接していくうちに、必ずしも積極的な理由でこの講習会に参加したわけではない筆者にもその漢籍への思いのようなものが感染したように思う。講習会の冒頭で井波先生がおっしゃられたような講習会の目的を私はいまだ達せられていないが、少なくとも今の私は漢籍に魅力を感じるに至っている。そのことがこの講習会で私が得た一番大きな財産であるとして、報告の結びとする。

注

- (1) http://www.kansai-u.ac.jp/library/about/lib_pub/forum/2002_vol7/2002_05_06.pdf
- (2) 写本・版本などを、原本どおりに活字に組むなどして新たに出版すること。「古鈔本を一する」(Japanknowledge「デジタル大辞泉」より)
- (3) <http://www.kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/kanseki/>
- (4) 写真の入手先 <http://asj.ioc.u-tokyo.ac.jp/html/lib004.html>
- (5) 『莊子』第1冊(岩波文庫), 岩波書店, 1971, p. 94~95
- (6) 京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター編『漢籍目録: カードのとりかた』朋友書店, 2005, p. 1
- (7) 高橋菜奈子“全国漢籍データベースとNACSIS-CATデータベース比較—漢籍目録の書誌記述の標準化のために—”『漢籍』(13), 2006, p. 57-73
- (8) 長沢規矩也編『學書言志軒藏書目録』和刻本漢籍之部, 1956
- (9) 長沢規矩也『和刻本漢籍分類目録』増補補正版, 汲古書院, 2006
- (10) 井波陵一『知の座標: 中国目録学』白帝社, 2003
- (11) <http://www.hyuki.com/aozora/replace.cgi>

(かとう ひろゆき 図書館事務室)